

■ 南スペインの定置網発展の歴史

「定置網は昔からある漁法というけれど、日本から始まったのですか？」と問われることがあります。日本では、江戸時代の初め（1615年頃）に山口県で大敷網が開始されたという記録があるようですが、世界的にはもっと、もっと古く、紀元前1千年以上前にまで遡るということです。その場所は、南部スペインですが、その発達の歴史を鹿児島大学のミゲル・バスケス・アーチ戴尔氏と井上喜洋氏に解説して頂きました。

南部スペインといっても、その場所は、地中海の出入り口に当るスペインとアフリカ大陸に挟まれたジブラルタル海峡です。今でも地中海のマグロは有名ですが、当時、この海域を行き来していたフェニキア人、ギリシャ人、カルタゴ人、ローマ人たちは、大西洋から地中海へ産卵のため回遊するマグロを定置網で獲っていたというのです（図参照）。

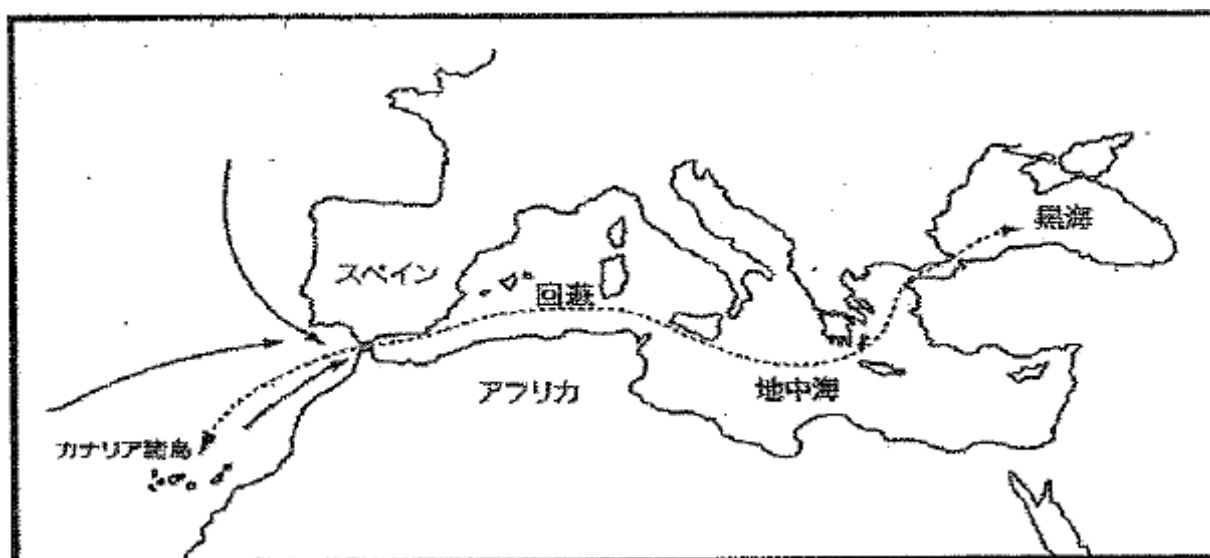


図 まぐろの回遊経路

フェニキア人などはそれぞれ海洋民族で、南スペインのアンダルシア地方に住みつき、獲ったマグロはギリシャ地方と交易していました。また、彼らは獲ったマグロを塩乾製品にして食し、内臓や頭は魚醤として利用しました。魚醤は「ガルム」と呼ばれ、水やワインで薄めて味付けや薬に使用していました。当時の貨幣に片面にマグロ、反面にヘラクレスが刻まれていたことから、マグロは相当高い経済価値があったことを証明しています。

西暦2世紀にはローマ帝国が衰退し、北欧のバンダル人や北アフリカのムーア人が勢力を広げたため、定置漁業も衰退しました。その後、キリスト教徒が1292年にジブラルタル海峡を征服し、進出してきたことから再び漁業が盛んになりました。更に1294年には、スペイン王が、グスマン家がムーア人から町を奪ったことを讃えて、グスマン家に定置漁業の権利を与えました。この一族は1817年に漁業権利が漁業組合に譲るまでの500年間定置漁業権を独占してきました。

14世紀には、1年間に平均200キログラムのマグロが4万尾も獲れたという記録があります。そして16世紀にはコニルとザハラ町だけでも10万尾、2万トンにまで達しました。こうしたマグロの販売によってメディア・シドニア公爵はアンダルシア最大の富豪になっています。この間、漁具や漁法は19世紀後半まで「アルマドラバ・デ・ティロ」と呼ばれる「曳網」が使われていました。これはマグロの魚群や数は魚見台から船に知らされ、地引網をもって数隻の船で掛け回すものです。

その後、「アルマドラバ・デ・ブチェ」と呼ぶ定置網が開発され、地中海で今日でも使われています。こ

の網は海岸に直角に張られた垣網とマグロを落とし込む袋網で構成されています。ここで獲れたマグロは現在、日本市場で高く買われているため、漁夫は安定した収入が得られます。マグロは、大西洋から地中海に産卵のため入ってくる脂の乗ったものと、産卵後に大西洋に出て行こうとするものが獲られています。産卵後の痩せたマグロは、漁獲後に生簀で収容され、餌を与えて蓄養され日本に運ばれています。

スペイン沖では1923年には32ヶ統の定置網がありましたが、1937年には5ヶ統のまで減少しました。現在、スペイン沖で獲れるマグロの90%以上は日本市場行きで、スペインに水揚げされることは殆どありません。日本へは、定置網から日本の加工船に直接水揚げされ、冷凍されて送られます。スペインの町でマグロを探したいのなら、オリーブオイル漬けの缶詰の「アトウン・デ・アルマドラバ（定置マグロ）」として販売されているそうです。

なお、今年（2008）の漁獲量は昨年（2007）の1,048尾の半分位しか漁獲できないと見えています。（「南部スペインにおける定置網“アルマドラバ”発展の歴史（鹿児島大学水産学部 ミゲル・バスケス・アーチデル、井上喜洋）」（「ていち」第114号から作成）